

1 中期学校経営方針

横浜市立桂小学校

平成30年度 学力向上アクションプラン

(1) 学校経営中期取組目標

学校経営中期取組目標

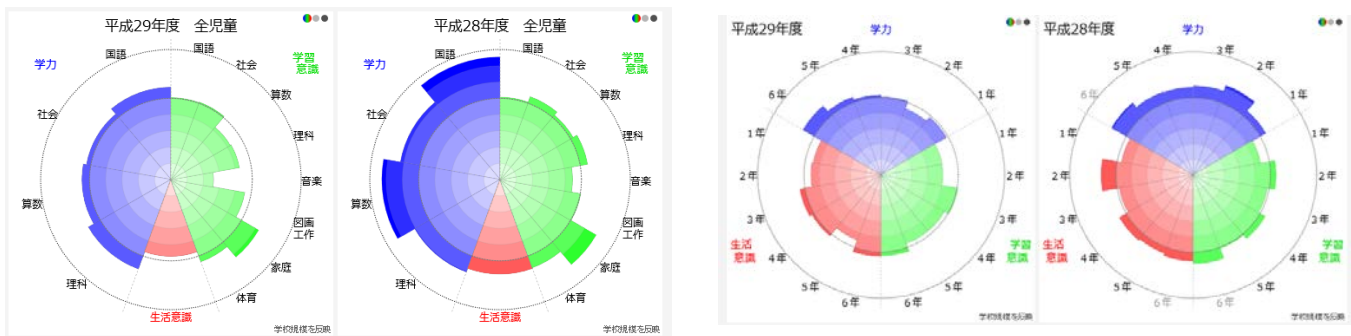
- 地域の中の学校を創造する
 - ・地域、PTA 行事等に教職員が積極的に参加できるよう、校務分掌に役割分担を位置づける。(学校防災を含む)
 - ・桂小学校運営協議会の充実を図る。(設置 H29年10月)
- 言語活動の重視(読書が好きなお子)・挨拶、言葉遣い⇒表現力・思考力・判断力・コミュニケーション力の育成
- 体験の重視(思いやりの気持ちをもち行動する子)・思い合う心⇒豊かな心の育成(生命の重視)
- 体力向上の重視(自ら自分の体を高める子)・体力づくり運動⇒健康力の育成

(2) 学力向上に向けた重点取組分野・取組目標・具体的取組

重点取組分野		取組目標	具体的取組
確かな学力と (学習指導)		基礎基本の確実な定着を図るとともに、それに基づいた思考力・判断力、及び自分の考えを伝え学び合うための表現力の育成を図る。すべての学習場面での言語活動の充実に努める。	①基本的な知識及び技能を確実に習得できるような学習場を積み上げる。 ②説明・報告・記録・対話・討論など言語活動を通じた学習場面を授業の中に位置付け、自分の考えを表現し交流し合う授業を行う。 ③自分の考えと比較しながら友だちの意見を聞く、集まった考えを分類する、他と関連付けて考えるなど、考え方を学んでいく場を適切に位置付け、自分の考えを明確にもって授業に取り組めるような指導を行う。
	担当		

2 横浜市学力学習状況調査等からの実態把握

(1) 学力の概要と要因の分析



全体として市平均近くの点数を示しているが、下回る学年も見られる。学年別に見ると、2年生が最も低く、6年生が最も高くなっている。また、高学年になるにつれて学力は高くなっている。市平均と比べて塾や家庭教師で勉強している割合が高く、学力が高い層は特に割合が高くなっている。「学校の授業はわかりやすいですか」という質問では「だいたいわかる」と回答した児童は、学力層の高い児童は全教科で6割を占めて市平均を上回っているが、学力層が低くなると半分以下になって市の平均を下回る。このことから、学校の授業の内容を理解できている児童が学力の高い子に偏っている傾向がみられ、その高い学力は学校の授業で身に付けたものというよりも、学校外の塾や家庭学習で身に付けたものであることが想像できる。今後は児童の中に「わかった」という実感が生まれるような授業を目指し、確かな学力を身につけさせる指導が求められると考えた。

(2) 教科学習の状況

- 国語科：全学年としてはほかの観点に比べて「話す聞く」の観点の点数が低く、市平均を下回る学年もある。
- 算数科：高学年を除いて技能の観点が市の平均を下回っている。
- 社会科：市の平均と大きな差はない。
- 理科：学力は平均して高いが、学習意識がどの学年も低くなっている。

(3) 経年変化の状況と要因の分析から、今後の授業づくりに向けて（学習・生活意識調査も含む）

全学年のデータを見ると、意識・学力ともに前年度から低下している。市の平均と比べると、低い水準とは言えないものの、学年によって平均を下回っている。学習意識に関しては市平均を下回る教科が多く、児童の中に学習へ前向きになれない様子が見られる。学力層別にみると、学力が低い児童は学習意識も低くなる傾向が見られる。学習意識の中でも、「好きかどうか」「大切かどうか」を問われる質問に関して前年度からの変化が見られた。各教科・領域を「好き」と答える児童が全体的に少し減り、「嫌い」と答える児童は全教科領域で増えている。また、各教科の学習が「大切」と答えた児童はすべての教科で前年度よりも少なくなっている。

本校の児童は、全学年を通じて、塾等で勉強している児童が、市の平均に比べて極めて多い。学年が上がるにつれてその傾向は顕著である。学習意識調査で、国語や算数の学習が楽しいと感じている割合は低く、理科や社会では割合が高い。塾等と学校での学習内容が重なることで、興味や関心に影響が薄れてしまうことも考えられる。学力は高いが、好きではない、それほど楽しいと感じているわけではないという児童と、学力が低く、分からないから、あまり楽しくないし好きではないという児童の両タイプが存在していることが考えられる。このことから、多層な学力層の児童に配慮しながら、授業づくりをすることの必要性が伺われる。基礎基本の内容をきちんと積み上げることができる授業でありながら、さらに自分の考えを説明するなど表現する活動や、学習したことを生活の中で活用できる場面を取り入れた授業などが考えられる。自分の考えを様々な形や場で表現する学習を増やすこと、そのために必要な指導を学年の発達段階に応じて、計画的に取り入れていくなど、授業改善の方向性としてもっていきたい。

3 平成 30 年度 学年・教科等としての具体的取組

- 1 学年**
- 国語科での学習をもとに相手や場に応じて適切な言葉づかいで話したり、相手の話に興味をもって聞いたりする場面を日常の中に位置づける。
 - 経験したこと、知らせたいことなどを文と文の続き方に注意して書くなどの表現活動を大切にす。
 - 自分の経験をもとに、感想や考えを表現できるように指導する。

- 2 学年**
- 生活科等での体験を通して、気付いたり発見したりしたことを文字で表現して友だちに伝えたり、説明したりする文章を書く。その発表を通して、質問し合ったりよさを認め合ったりする場面を大切にす。
 - 学習場面では、先生や友だちの発問や発言をしっかり聞くこと。その際自分の考えと同じところ・違うところを意識しながら聞くよう促す。
 - 自分の経験の中から話したいことを友だちに伝えたり、友だちの話聞いて感想や考えをもち交流したりする機会をもつようにす。

- 3 学年**
- 社会科・総合等で見学・調査・体験したことを説明する文章、報告する文章を書いたり、話し合ったりする場面を多く設定するなどして表現活動を大切にす。
 - 理由や根拠を尋ねたり、まとめたりしながら話し合うように指導する。
 - 順序を付けたり、比べたりして考える学習を計画的に位置づける。

- 4 学年**
- 算数・理科等で説明する文章、記録・報告する文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに、話し合いをする場面を位置づける。
 - 反対の意見を出したり、相手の考えを取り入れ自分の考えを述べたりしながら話し合うように指導する。
 - 順序を付けたり関連付けたりして考える学習を計画的に位置づける。

- 5 学年**
- 朝作文、各教科の学習で説明文、意見文、感想文を書く活動を継続して行うとともに、自発的に話し合いをする場面を計画的に位置づける。
 - 相手の話を一般化したり、経験を加えて拡張したりしながら話し合うよう指導する。
 - 資料や事例を関連付けたり、分類、整理し、そこから分析、思考する学習を意図的に設ける。

- 6 学年**
- 見通しをもって単元に取り組むことで自分に合った学習を計画的・主体的に取り組めるようにす。
 - 話し合いを通して曖昧な点を明確にしたり違った視点を打ち出したりしながら対話的な学習を展開し、深い学びへとつなげる。
 - 関連付けたり、分類・整理したり、相互に見合い高めていくこと2で、多面的に考え、それを表現できるようにす。

- 個別支援学級**
- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、仕草、書き言葉等、発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場面を位置づける。
 - 子どもの発達段階に応じて、各学年の取組を参考にし、必要な取組を行う。
 - 子どもに応じた分かりやすい視覚的支援や活動のための環境整備を行う。